
年 報

第二号 平成31～令和2年度

Vol.2 HOSHUN YAMAGUCHI MEMORIAL HALL



山口蓬春記念館

目次

I. 展示及び関連イベント等の概要（平成31～令和2年度）	01
II. 「没後50周年記念 山口蓬春展」開催記録	10
III. 収蔵品修復（日本画）	16
IV. 収蔵品修復（油彩画）	17
V. 収蔵品保存対策	18
VI. 新収蔵品	19
VII. 刊行物の発行（平成31～令和2年度）	20

I. 展示及び関連イベント等の概要（平成31～令和2年度）

平成31年度は、当館所蔵以外の作品を他館から借用した企画展を3回、収蔵品展を2回開催した。しかし、新型コロナウイルス感染症が世界規模で流行したことにより、新型コロナウイルス感染症拡散防止対策及び政府による「緊急事態宣言」の発出等を受け、3月4日から6月18日までの間を臨時休館とした。

令和2年度は、当館として可能な限り感染症拡散防止対策を講じ、外出自粛の段階的緩和の目安となった6月19日から開館し、他館から作品を借用した特別展を3回、収蔵品のみ企画展を1回開催した。この間も新型コロナウイルス感染症は世界的大流行（パンデミック）の様相を見せ、東京五輪並びにパラリンピックも開催を延期することとなり、当館も多くのイベントを中止せざるを得ない状況となった。

コロナ禍の最中でもある令和3年は、山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念となることから、蓬春の画業を3期に分けて紹介する展覧会を企画し、2月からの展覧会にその第1期目をあて、生誕地である北海道に着目した特別展を開催した。

※展覧会の名称について、令和2年度より他館から作品借用を伴う展覧会については企画展から特別展と改め、収蔵品展は企画展とした。

※名称等の表記については、開催時の呼称をもとに若干の修正を加えた。

平成31年度

■ 春季企画展

時代の証人 山口蓬春の描いた明治・大正・昭和

平成31年4月13日(土)～6月9日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

- 前期：4月13日(土)～5月12日(日)
- 後期：5月14日(火)～6月9日(日)
- 後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
- 開館日数：51日

山口蓬春は、東京美術学校日本画科を大正12年(1923)に卒業するまで、数多くの古典絵画を研究し、やまと絵の基礎を築いた。その後、新興大和絵会での活躍により、近代化をめざした数多くのやまと絵の風景画を手がけていることはよく知られている。しかしその一方で古典絵画の研究成果が結実した歴史画制作の名手でもあった。

こうした真摯な研究態度も手伝い、蓬春のもとには歴史画制作の依頼も舞い込むようになる。それらの作品には西洋画科時代に培った確乎たるデッサン力を基に、綿密な現地視察、自らが甲冑や装束を着用してモデルとなり歴史人物画の制作など、時代の証人・蓬春ならではの緻密な時代考証の技術が寸分の狂いもなく集約されている。

本展では蓬春が『天皇の世紀』（大佛次郎著）の挿絵原画（昭和42年）として描いた明治時代の日本のすがたを中心に、大正時代の風俗を活写した《女の肖像》（大正元年頃）、《初夏の頃》（大正13年）、昭和大典の皇室儀礼を描いた下図（未発表）なども展示した。なお、この度の改元を祝賀して、皇居宮殿正殿松の間のために蓬春が描いた杉戸《楓》下絵、ならびにその制作過程が窺われる素描など、皇室ゆかりの収蔵品もあわせて紹介した。



チラシ
山口蓬春
《御堂供養》
《初夏の頃（佐保村の夏）》
（部分）

主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
女の肖像	山口蓬春(1893-1971)	大正元年(1912)頃	板、油彩	山口蓬春記念館
御堂供養	山口蓬春	大正9年(1920)頃	絹本着色	神奈川県立近代美術館
初夏の頃(佐保村の夏)	山口蓬春	大正13年(1924)	絹本着色	山口蓬春記念館
多摩御陵園(『婦人倶楽部』口絵)	山口蓬春	昭和2年(1927)3月号掲載	絹本着色	一般財団法人野間文化財団
四月舞楽(『十二ヶ月図』より)	山口蓬春	昭和2-3年(1927-28)	絹本着色	一般財団法人野間文化財団
ゴルフ小下図 (合作絵巻「現代風俗絵巻」より)	山口蓬春	昭和3年(1928)	紙、鉛筆・ 色鉛筆・水彩	山口蓬春記念館
洋装女性(モデル：妻・春子) (『岩倉大使欧米派遣』制作のための参考写真)	山口蓬春撮影	昭和9年(1934)撮影	写真	山口蓬春記念館
楓図下図	山口蓬春	昭和45年(1970)	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩・岩絵具	山口蓬春記念館
凌雲閣(『天皇の世紀』装画)	山口蓬春	昭和42年(1967)6月9日136号掲載		神奈川県立近代美術館
宸翰 嘉辰令月遊	後水尾天皇	江戸時代(17世紀)	紙本墨書	山口蓬春記念館
	入江相政(1905-1985)	昭和30年(1955)代	紙本墨跡	山口蓬春記念館

関連イベント

● 展示解説

日時：4月21日(日) 14:00 - (約20分)
参加人数：6名

● 第16回児童・生徒のための美術に親しむ教室

「日本画で使用する岩絵具や膠を使って描いてみよう」
日時：5月3日(金・祝) 13:00 - 16:00
会場：多目的室
講師：高橋朋子(東京都立総合芸術高等学校美術科講師)
参加人数：9名(応募者9名)

● 「国際博物館の日」来館者プレゼント

日時：5月18日(土)

● 初夏の呈茶会

日時：6月1日(土)、2日(日) 12:30 - 15:00
会場：旧画室

料金：1席 一般 600円(お菓子付き、要別途入館料)

親子1組 1,200円(お菓子付き、要別途入館料)

協力：葉山町茶道連盟

参加人数：1日14名、2日19名

■ 夏季企画展

山口蓬春の「静物画」－庭園に咲く花々と古陶磁の魅力－

令和元年6月15日(土)～9月23日(月・祝) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期：6月15日(土)～7月26日(金)
 【後 期：8月7日(水)～9月23日(月・祝)
 【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数：78日

山口蓬春(1893-1971)は、伝統的な日本画の技法を基盤としつつ、古今東西の芸術を吸収しながらその時代ごとの感覚を意識した新しい日本画の創造に取り組んでいる。その多岐に亘る画業のなかで、昭和30年(1955)以降には、自ら蒐集した古陶磁に庭園で咲く花々や果物をあわせて繰り返し静物画を描いてきた。そこには「古陶磁に内在する美を捉える眼力」と、「自然を愛でるあたたかなところ」が感じられる。同じテーマで繰り返し描くことで、新たな視点で捕らえなおし、時を経ても変わらぬ美を追求したのであろうか。

本展では、蓬春の描いた静物画に着目し、そこに描かれた古陶磁や美しい花々の写真をあわせて展示し、日々蓬春が目指した新日本画の一端を紹介した。



チラシ
山口蓬春《瓶花》

■ 主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法	所蔵
まり藻と花	山口蓬春(1893-1971)	昭和30年(1955)	紙本着色	山口蓬春記念館
枇杷	山口蓬春	昭和31年(1956)	紙本着色	山口蓬春記念館
静物	山口蓬春	昭和33年(1958)	紙本着色	公益財団法人 水野美術館
桔梗 写生	山口蓬春	昭和38年(1963)	紙、鉛筆・ 色鉛筆・水彩	山口蓬春記念館
瓶花	山口蓬春	昭和40年(1965)	紙本着色	北澤美術館
瓶花	山口蓬春	昭和45年(1970)	紙本着色	北澤美術館
黒釉鉄絵玉壺春瓶	中国・磁州窯	宋・金時代(12-13世紀)	磁器	山口蓬春記念館
エジプト緑釉唐草文大鉢	エジプト	13世紀	陶器	山口蓬春記念館

■ 関連イベント

● 展示解説

日時：6月30日(日) 14:00 - (約20分)

参加人数：9名

● 夏休み親子鑑賞期間割引

期間：8月7日(水)～31日(土)

● 第55回 葉山特別見学会

日時：9月5日(木) 9:30 - 14:30

場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・
山口蓬春記念館

参加人数：37名(応募72名)

■ 秋季企画展

花鳥風月 - 山口蓬春、日本の美を描く -

令和元年9月28日(土)～11月24日(日)

【後援】 神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

【開館日数】 50日

日本には、自然の美しさを表現する言葉として「花鳥風月」がある。「花鳥」とは、古来より観賞の対象となり、詩歌、絵画などの題材とされる自然の景物の代表としての「花」と「鳥」を表し、「風月」とは自然の風景の代表としての「風」と「月」を意味する。豊かな自然に囲まれ、四季折々に様々な表情を見せる日本に暮らす私たちは、世界に類を見ない繊細な文化を育みながら、移りゆく季節を敏感に感じ取り、そこに生きる植物や生物、自然の情景に想いを寄せてきた。

「花鳥画の、作品の優劣は、その作家の自然への愛の深さと、観察の力の如何とのみが決定的と謂っていい。」(山口蓬春「花鳥画を描く心」『邦画』4月号、昭和10年〔1935〕) そう述べた蓬春は、自邸の庭で羽を休め、時に巣を営む小鳥たちにも深い愛情を注ぎ、その自然への愛の深さから「日本野鳥の会」設立の際には発起人となっている。そして、親しい芸術家らを招き、春は花、秋は月見の宴を催していた蓬春は、日本人の感性とそのまなざしを誰よりも大切にしてきたといえる。真の画境を「自然即自身」と説き、「自分の心と自然の意気がびったり合ったところ、其処に本当の題材が得られる。」(『美術』9月号、昭和9年〔1934〕)とも語る蓬春の作品には、自然こそが創造の源泉であり、あるがままの自然の移ろいを讃美し、例え一輪の花からでもその背後にある森羅万象にまで思いを馳せようとする、日本人の「心」そのものが体現されている。

本展では、花や鳥、自然の風景などを主題とした蓬春の代表作を通じて、そこに息づく自然の美や生命の輝きを再発見していただくとともに、蓬春芸術の根幹にある“日本の美”とそこに宿る普遍性や独自性をご覧いただいた。



チラシ
山口蓬春《秋影》

■ 主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
【花】【鳥】				
冬(枯山水)	山口蓬春	昭和38年(1963)	紙本着色	東京国立近代美術館
夏	山口蓬春	昭和40年(1965)	紙本着色	東京国立近代美術館
白蓮木蓮(新橋演舞場緞帳原画)	山口蓬春	昭和33年(1958)	紙本着色	山口蓬春記念館
秋影	山口蓬春	昭和14年(1939)	紙本着色	東京国立近代美術館
花菖蒲	山口蓬春	昭和37年(1962)	金地着色	山口蓬春記念館
【風】				
濤	山口蓬春	昭和23年(1948)	紙本着色	東京国立近代美術館
飛潭	山口蓬春	昭和34年(1928-9)頃	絹本着色	山口蓬春記念館
【月】				
残寒	山口蓬春	昭和17年(1942)	紙本着色	東京国立近代美術館
望郷 小下絵	山口蓬春	昭和28年(1953)	紙本着色	山口蓬春記念館
飛鴨園	尾形光琳	江戸時代(18世紀初頭)	紙本着色	山口蓬春記念館
月 六潮会同人他讃	福田平八郎他	昭和10年(1935)	紙本墨画	山口蓬春記念館

■ 関連イベント

● 秋の呈茶会

日 時：10月5日(土)、6日(日) 12:00 - 14:30

会 場：桔梗の間及び茶の間

料 金：1席600円(お菓子付き、要別途入館料)

協 力：葉山町茶道連盟

参加人数：5日19名、6日14名

● スペシャル・ギャラリートーク

「絵のなかの鳥を鳥類学的な視点で見ると？」

日 時：10月27日(日) 14:00 - 15:00

会 場：多目的室及び展示室

解 説 者：東郷なりさ(絵本作家・鳥類画家)

参加人数：17名

● 邸園ツアー

日 時：11月3日(日・祝) 11:00 - 11:40

会 場：本館及び庭園

参加人数：11名

● 展示解説

日 時：11月24日(日) 14:00 - (約20分)

参加人数：2名

■ 初冬収蔵品展

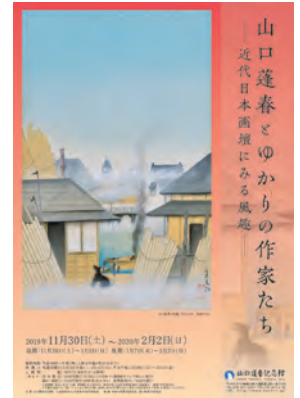
山口蓬春とゆかりの作家たち - 近代日本画壇にみる風趣 -

令和元年11月30日(土)～令和2年2月2日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

- 前期：11月30日(土)～1月5日(日)
- 後期：1月7日(火)～2月2日(日)
- 後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
- 開館日数：51日

山口蓬春(1893-1971)は、大正から昭和の日本画壇において新たな可能性を目指し、日本画の進むべきひとつの方向を示した画家である。大正12年(1923)に東京美術学校日本画科を卒業すると、師・松岡映丘が主宰する新興大和絵会に参加、やまと絵の近代化を模索する。その後、さらなる飛躍を求めて六潮会という団体を結成し、ここでは、日本画家、洋画家、美術評論家という異なるジャンルのメンバーたちとともに研鑽を積み、有意義な交流をも育んでいる。一方、戦時中には従軍画家として藤田嗣治らと戦地に赴き、お互いに強い影響を与えあった。戦後は西欧の美術の動向をいち早く取り入れたモダニズムの傾向を示す作品を次々に発表し、日本画壇の先駆者として若い作家たちに大いに感化を与えた。このように蓬春の画業を辿っていくと、時代とともに多くの作家たちとの交流や、その影響による創作活動の変化の跡が見受けられる。

本展では、当館が収蔵する山口家より提供を受けた蓬春作品や蓬春が蒐集した美術品などから、蓬春も関心を寄せていた近代の作家たちに焦点をあて、戦前から戦後にかけての蓬春の多彩な交友と作品の風趣を探った。



チラシ
山口蓬春《木場》

■ 主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法
木場	山口蓬春(1893-1971)	大正14年(1925)	絹本着色
春汀	山口蓬春	昭和12年(1937)頃	金地着色
泰山木	山口蓬春	昭和14年(1939)	絹本着色
南嶋薄暮	山口蓬春	昭和15年(1940)	紙本着色
何仙姑	吉川霊華(1875-1929)	大正7年(1918)	絹本墨画淡彩
沼風	森田恒友(1881-1933)	不詳	紙本着色
廣東風景図	藤田嗣治(1886-1968)	昭和17年(1942)	紙本淡彩
芒野原	牧野虎雄(1890-1946)	昭和12年(1937)	紙本墨画彩色
雨	木村莊八(1893-1958)	昭和13年(1938)	紙本着色
山口蓬春宛年賀状	橋本明治(1904-1991)	昭和45年(1970)	葉書
花	大山忠作(1922-2009)	昭和20年(1945)代	紙本着色

※出品作は全て当館所蔵。

■ 関連イベント

● 邸園ツアー

日時：12月7日(土) 11:00 - 11:40
会場：本館及び庭園
参加人数：7名

● 展示解説

日時：12月8日(日) 14:00 - (約20分)
参加人数：2名

● 第56回 葉山特別見学会

日時：12月20日(金) 9:30 - 14:30
場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
参加人数：16名(応募17名)

● 鎌倉市鏑木清方記念美術館との連携イベント

期間：1月4日(土)～2月29日(土)
①ワークシート「日本画の美術館を巡ろう！」配布
②オリジナルグッズプレゼント(先着順)

■ 新春収蔵品展

初春と蓬春 - 福を求め、描き、そして愛した吉祥の美 -

令和2年2月8日(土)～4月5日(日)

※会期中、一部展示替えを行ったが、新型コロナウイルス感染症拡散防止のため、3月4日(水)から臨時休館とし、会期終了となった。

【前期】：2月8日(土)～3月8日(日) ※前期のうち、3月4日から12日まで臨時休館。

【後期】：3月10日(火)～4月5日(日) ※後期は全期間、臨時休館。

【後援】：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

【開館日数】：21日

私たちは日々の暮らしの中で花鳥や草木の命を慈しみ、パワースポットでもある風光明媚な場所を訪ねては、その地にまつわる縁起に心惹かれている。また、ときにラッキーアイテムとして思わず手に取りたくくなるような吉祥由来のデザインを身に着け、無病息災や良縁など、幸せや福を求めて祈りを捧げている。

日本画家・山口蓬春(1893-1971)はその生涯において、自らと周りの人々の「福」を求めて生きた画家である。若い頃は奈良や京都、熊野など霊験あらたかな地を巡り、その中の那智の滝を描くことで鮮烈な画壇デビューを果たした。また、戦後移り住んだ葉山の邸宅では木彫の狛犬が玄関を護り、家屋の北東には枇杷の樹を植えて鬼門を封じていた。新アトリエが完成した際も、年を越してあえて新年の吉日から使い始めるという具合であった。さらに、来客には吉祥文のあしらわれた貴重な器でおいしい料理を存分にふるまうなど、皆と幸せを分かち合った。

令和初の新春を迎える本展では、山口蓬春が描いた「福」を求める日本画ならびに収集した吉祥の美術を展示した。



チラシ
山口蓬春《武陵桃源》

■ 主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法
文正筆 鳴鶴図 模写	山口蓬春(1893-1971)	大正7-12年(1918-23)頃	紙本墨画淡彩
武陵桃源	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色
飛天	山口蓬春	昭和5-6年(1930-31)	絹本着色
春野	山口蓬春	昭和6年(1931)	絹本着色
『時事漫画』「帝展号」原画	北沢楽天(1876-1955)	大正15年(1926)10月31日 287号掲載	紙、インク・水彩
騎獅文殊尊像	不詳	鎌倉時代(12-14世紀)	絹本着色
白鷺図	呂紀派	明時代(16世紀)	絹本着色
重文 十二月風俗図	伝 土佐光吉(1539-1613)	桃山時代(16世紀後半)	紙本着色
那智の滝を描く蓬春 写真	不詳	大正15年(1926)夏	写真
三彩樹下美人俑	中国・長安及び洛陽	唐時代(8世紀)	陶器
狛犬(阿形・吽形)	不詳	鎌倉時代(13世紀前半)	木製
螺鈿牡丹唐草文手箱	朝鮮半島製	朝鮮時代(18世紀)	漆工

※出品作は全て当館所蔵。

■ 関連イベント

● 展示解説

日時：2月16日(日) 14:00 - (約20分)

参加人数：6名

令和2年度

■ 春季特別展

山口蓬春と祭典 - 東京オリンピック -

令和2年4月11日(土)~7月26日(日)

※会期中、展示替えを行った。緊急事態宣言の発出を受け、6月18日(木)まで臨時休館とした。

| 後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

| 開館日数：32日

東京オリンピックが開催される3年前の昭和36年(1961)、山口蓬春(1893-1971)はオリンピック東京大会組織委員会が設置した「芸術展示特別委員会」の委員に就任している。そして、戦後復興からの大きな経済成長を遂げた日本でのオリンピックの成功と、日本の芸術文化の推進に貢献した。東京オリンピックが開催されるこの昭和39年(1964)、画業の絶頂期にあった蓬春に、皇居の最高の儀式を行う宮殿松の間杉戸絵の制作という、画家としてもっとも栄誉ある仕事が依頼された。この杉戸絵の制作は、蓬春の画業のひとつの転換期ともいえる新しい日本画創造への道を拓き、翌昭和40年(1965)、蓬春は栄えある文化勲章を受章することになった。

今回の展覧会では、蓬春が長い画業の中で描いてきた作品、ならびにコレクションの中から、オリンピックのテーマでもある「宴」「競い」「祭り」といったテーマで展示した。まず、「宴」のテーマでは、第3回新日展に出品され、酒杯を高々と捧げ持つ三体の埴輪を題材とした《宴》(昭和35年〔1960〕、神奈川県立近代美術館蔵)とその周辺を、さらに、「花の宴」ともいうべき、《瓶花》(昭和40年〔1965〕、当館蔵)などの気品漂う蓬春の花卉図の魅力を紹介した。次に、「競い」では小野小町、お市の方など蓬春が描いた美人の系譜を。そして、最後の「祭り」では《十二月風俗図》(16世紀、当館蔵)より京の街の復興とともに、町衆の手によって再興された活気あふれる「祇園祭」の場面を展示した。



チラシ
山口蓬春《宴》
伝土佐光吉《十二月風俗》
より「祇園祭」(部分)

■ 主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法	所蔵
《浅井長政夫人像》模写	山口蓬春(1893-1971)	大正7-昭和6年(1918-31)	紙本着色	神奈川県立近代美術館
小野小町の図	山口蓬春	昭和2年(1927)	紙本着彩	神奈川県立近代美術館
《佐竹本三十六歌仙絵巻》模写 ゴルフ 小下図 (合作絵巻「現代風俗絵巻」より)	山口蓬春	昭和3年(1928)	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩	山口蓬春記念館
乙女椿	山口蓬春	昭和35年(1960)	紙本着色	個人
宴	山口蓬春	昭和35年(1960)	紙本着色	神奈川県立近代美術館
瓶花	山口蓬春	昭和40年(1965)	紙本着色	山口蓬春記念館
重文 十二月風俗図	伝土佐光吉(1539-1613)	桃山時代(16世紀後半)	紙本着色	山口蓬春記念館
義家朝臣鎧着用次第 (['放實叢書』鎧着用次第より)	今泉定介(1863-1944)編 吉川半七(1839-1902)発行	明治22年(1889)	和装、折本	神奈川県立近代美術館 山口蓬春文庫
漢瓦白馬俑	中国・長安及び洛陽	唐時代(8世紀頃)	陶俑	山口蓬春記念館

■ 夏季企画展

山口蓬春が描く花鳥の美 - 自然への愛の深さと、観察の力 -

令和2年8月1日(土)～11月23日(月・祝) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前 期：8月1日(土)～9月27日(日)
 【後 期：9月29日(火)～11月23日(月・祝)
 【後 援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数：99日

戦後、昭和22年(1947)に山口蓬春(1893-1971)は、疎開先の山形県赤湯町(現・南陽市)から引き揚げ、風光明媚な神奈川県葉山町に移り住む。翌年、御用邸近くの一色三ヶ岡に居を構え、23年間この地で制作に励んだ。蓬春は温暖で自然豊かな葉山を、心の全てが素直に解放される場として、この地で新しい日本画の創造に邁進した。

山口邸の庭園には、蓬春夫妻が丹精を込めて手を入れた四季折々の草花が咲き誇り、作品の題材としても登場する。特に紫陽花は蓬春が好んで描いた花の一つである。蓬春は日々庭園に向かい写生帖と鉛筆を手に取り多くの花々を描き留めた。写真家の土門拳(1909-1990)は、蓬春がくわえ煙草で草花に向かう姿をとらえている。

日本画の制作は、はじめに写生を行い、続いて下図を描き本制作へと移ってゆく。つまり、写生は本制作への出発点となり、対象を前にしたときの画家の最初の感動が表れているといえる。さらに、蓬春は、「日本画の古典的なものを、充分に研究しなければ、結局は新しい感性の働きで、正しく新しい素材を見出す事は出来ない」(山口蓬春『新日本画の技法』昭和26年[1951]、美術出版社)と述べており、蓬春自身も古典を学ぶことに余念がなかった。蓬春が蒐集した尾形光琳の《飛鴨図》をはじめとする優れた古美術品は、新日本画創造の源泉の一つであったと言っても過言ではないであろう。

本展では、蓬春の自然への愛の深さが伝わる日本画や、臨場感溢れる写生と下図、ならびに東京美術学校時代から続く古典模写と蓬春が愛蔵したコレクションを展示し、伝統的な花鳥画を踏まえつつ、新しい日本画を創造した蓬春の画業の一端を紹介した。



チラシ
山口蓬春《夏の花》

主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法
王淵筆 蓮白鷺図 模写	山口蓬春(1893-1971)	大正7-8年(1918-19)	紙本着色
春野	山口蓬春	昭和6年(1931)	絹本着色
まり藻と花	山口蓬春	昭和30年(1955)	紙本彩色
夏影	山口蓬春	昭和38年(1963)	紙本着色
夏の花	山口蓬春	昭和45年(1970)	紙本着色
紫陽花 写生	山口蓬春	不詳	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩
白鷺図	呂紀派	明時代(16世紀)	絹本着色
飛鴨図	尾形光琳(1658-1716)	江戸時代(18世紀)	紙本墨画

※出品作は全て当館所蔵。

■ (公財)JR東海生涯学習財団設立30周年初冬特別展

秘蔵コレクションによる美の競演 - 山口蓬春と近代日本画の巨匠たち -

令和2年11月28日(土)～令和3年1月31日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前期】11月28日(土)～12月27日(日)
 【後期】1月5日(火)～1月31日(日)
 【後援】神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数】50日

日本画家・山口蓬春(1893-1971)は、東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科に入学するも、その後、日本画科に転科した。そして常に伝統的な技法を基盤としつつも広く古今東西の芸術を吸収しながら新日本画の世界を切り拓いた。時代感覚を投影することで創り上げられたその独自の世界は「蓬春モダニズム」と形容され、日本美術展覧会(日展)を中心とする戦後の日本画壇に確かな足跡を残している。

蓬春は、特定の画塾を作ることはなかったが、その活躍を目の当たりにした若い画家たちは、次第に彼のもとに集まり、幅広い交友関係を築いていった。そして新日本画創造という自らの画業にまい進しつつ、後進の画家たちに対しては惜しみない助言を与え、戦後の日本画壇を牽引していった。その功績が認められた蓬春は、昭和25年(1950)に日本芸術院会員に任命され、昭和40年(1965)、ついに最高の栄誉となる文化勲章を受章した。

昭和46年(1971)5月31日に蓬春が没した後、山口家より蓬春の作品をはじめ、所蔵の美術品の寄贈を受けた(公財)JR東海生涯学習財団は、平成3年(1991)10月15日、蓬春の偉業を永く後世に伝えることを目的として、山口蓬春記念館を開館した。開館にあたり当財団では、蓬春の新日本画の精神に共鳴し、共に日本画壇を築き上げた親交のある画家たちに『蓬春先生の思い出』(平成3年[1991])への寄稿及び作品の制作を依頼、多くの日本画家たちにご協力をいただいた。

本展では、蓬春の作品のほか、現在では秘蔵コレクションとなったそれら巨匠たちによる珠玉の作品とともに蓬春との深い絆を表す言葉を合わせて展観する。本年、財団設立30周年を迎え、来年には蓬春没後50年という大きな節目を控えた今、蓬春の新日本画創造へ取り組みとその画業が日本画壇に与えた影響を改めて捉え直した。



チラシ
山口蓬春《緑庭》

主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
緑庭	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	山口蓬春記念館
都波喜	山口蓬春	昭和26年(1951)頃	紙本着色	山口蓬春記念館
洩るゝ陽	山口蓬春	昭和36年(1961)	紙本着色	山口蓬春記念館
富士に献花	片岡球子(1905-2008)	平成2年(1990)頃	紙本着色	個人
庭の雪	東山魁夷(1908-1999)	平成5年(1993)	紙本着色	個人
妙義湖秋輝	奥田元宋(1912-2003)	平成4年(1992)頃	絹本着色	個人
里の道	高山辰雄(1912-2007)	平成6年(1994)	絹本着色	個人
総がらみ	加藤東一(1916-1996)	平成4年(1992)	紙本着色	山口蓬春記念館
歎	加倉井和夫(1919-1995)	平成4年(1992)頃	紙本着色	個人
洋上の富士	佐藤園夫(1922-2006)	平成4年(1992)	紙本着色	個人
香河畔古都フエトナム	平山郁夫(1930-2009)	平成5年(1993)頃	紙本着色	個人

関連イベント

● 邸園ツアー

日 時：12月5日(土)、6日(日)
 ①11:00-11:40 ②13:00-13:40
 会 場：本館及び庭園
 参加人数：5日①2名 ②雨天中止、6日①0名 ②5名

● 展示解説

日 時：1月9日(土) 11:00-(約20分)
 参加人数：1名

● 会期中、『蓬春先生の思い出』抜粋版(山口蓬春記念館開館記念文集)を作成、無料配布した。

■ 山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念特別展 ー第I期 出発ー

北海道の大自然が生んだ山口蓬春・新日本画の魅力

令和3年2月6日(土)～4月4日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

【前期】：2月6日(土)～3月7日(日)
 【後期】：3月9日(火)～4月4日(日)
 【後援】：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会
 【開館日数】：50日

令和3年(2021)5月31日は、日本画家・山口蓬春の没後50年の節目であるとともに、同年10月には、山口蓬春記念館が開館してから30周年となる。当館では、この記念すべき年を迎えるにあたり、「山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念特別展」を3回にわたり開催し、蓬春の生涯と画業の変遷を新たな研究成果に基づいて展観する。

日本画家・山口蓬春(1893-1971)は、明治26年(1893)に北海道松前郡にて生を受け、津軽海峡を臨む松前城二の丸跡にあった生家で育つ。その後、父の仕事の都合で上京したが、感受性を育むこの時期に豊かな大自然と新しいものに挑戦する人々の姿などを間近に感じられる北海道で過ごした影響は画業を通じて生涯にわたり続いていったといえる。

昭和6年(1931)、北海道出身の在京画家を中心に北海道美術家連盟が結成されると、蓬春は会員として参加する。山形県に疎開していた昭和21年(1946)には、北海道で創刊された雑誌『北方風物』に表紙絵のほか北海道での思い出を綴った「鳥」を寄稿する。そして昭和30年(1955)、日本美術展覧会北海道展開催のため、約50年ぶりに故郷を訪れた蓬春は、この時の印象をもとに《まり藻と花》を制作した。また、昭和38年(1963)に『朝日新聞夕刊』に掲載された「新・人国記」北海道編では、挿絵43枚を蓬春が担当している。

蓬春は、北海道についてしばしば言及する機会もあり、自らの故郷を強く意識していたことが窺える。常に新しさを求める「求新」の人と例えられた蓬春の新日本画創造にかけた不屈の精神とその原動力は、“道産子”としての自負に由来しているようにもみえる。

本展では、人間・山口蓬春のアイデンティティとして北海道を捉え、画業の変遷を辿りながら蓬春が追い求めた新日本画の魅力を探った。



チラシ
山口蓬春
《まり藻と花》《瑞鶴》(部分)

主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
浄地閑寂(浄境閑寂)	山口蓬春	大正15年(1926)	絹本着色	北海道立近代美術館
松原図	山口蓬春	昭和7年(1932)	紙本着色	北海道立函館美術館
暖冬	山口蓬春	昭和8年(1933)	金地着色	北海道立近代美術館
春野	山口蓬春	昭和10年(1935)	絹本着色	北海道立近代美術館
六月(五位鶯) (国画院同人合作「十二ヶ月連幅」)	山口蓬春	昭和10年(1935)	紙本着色	北海道立近代美術館
初冬	山口蓬春	昭和10年(1935)	絹本着色	北海道立近代美術館
瑞鶴	山口蓬春	昭和18年(1943)	絹本着色	北海道立函館美術館
冬菜	山口蓬春	昭和30年(1955)	紙本着色	北海道立近代美術館
向日葵	山口蓬春	昭和30年(1955)	紙本着色	北海道立近代美術館
まり藻と花	山口蓬春	昭和30年(1955)	紙本着色	山口蓬春記念館
籠中春花	山口蓬春	昭和31年(1956)	紙本着色	北海道立近代美術館
紫陽花	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色	北海道立近代美術館

関連イベント

- 第57回 葉山特別見学会
 日時：2月26日(金) 9:30-14:30
 場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
 参加人数：中止

- 呈茶会
 日時：3月6日(土)、7日(日) 11:00-14:20
 会場：桔梗の間
 料金：1席600円(お菓子付き、要別途入館料)
 協力：葉山町茶道連盟
 参加人数：中止

- 展示解説
 日時：3月28日(日) 14:00-(約20分)
 参加人数：1名

Ⅱ.「没後50周年記念 山口蓬春展」開催記録

加藤 慶輝

■「山口蓬春展 新日本画創造への飽くなき挑戦」

－新しき日本の伝統美、その時代を超えて－

- 【会 期】：東京 令和元年(2019)8月7日(水)～8月19日(月)
大阪 令和元年(2019)8月28日(水)～9月9日(月)
- 【会 場】：東京 日本橋高島屋S C本館8階ホール
大阪 大阪高島屋7階グランドホール
- 【主 催】：朝日新聞社 NHKプロモーション(東京会場)、NHKプラネット近畿(大阪会場)
- 【特別協力】：山口蓬春記念館

■「没後50周年 山口蓬春展 蓬春が目指した、新しい日本画の可能性」

－伝統美なのか、新たな創造美なのか――。－

- 【会 期】：令和3年(2021)4月14日(水)～4月26日(月)
- 【会 場】：名古屋 ジェイアール名古屋タカシマヤ 10階特設会場
- 【主 催】：中日新聞社 NHKエンタープライズ中部
- 【特別協力】：山口蓬春記念館

大正、昭和の日本画壇で新しい日本画の創造を目指した山口蓬春(1893-1971)。その半世紀にわたる画業の足跡をたどる回顧展を東京、大阪そして名古屋で開催した。

蓬春は明治26年(1893)に北海道松前町に生まれ、東京美術学校(現東京藝術大学)の西洋画科に入学したが、指導教官の助言から日本画科に転科。卒業後はやまと絵の第一人者として活躍した。その後、日本画家や洋画家そして美術評論家らで結成した六潮会に参加し、流派を超えた研鑽の場の中で、独自の絵画領域を広げてゆく。戦後は日展を軸として作品の発表を続け、とくに昭和20年代は「蓬春モダニズム」と形容される知的でモダンな作風を展開した。また、この実験的な作品は、行き先を見失いがちであった若手日本画家にとって大きな指標となった。

蓬春が目指した新日本画は、伝統的な技法を基盤にしつつ広く内外の芸術を吸収することにより時代感覚を意識した独自の世界を創り上げ、戦後の日本画壇に一つの進むべき道筋を示した。その長年の業績が称えられ、昭和40年(1965)には文化勲章を受章した。

今回の回顧展では、初期から晩年にいたる代表作約50点を選定し、令和元年8月には、没後50年の節目を前に、蓬春が追い求めた新しい時代の伝統美を堪能できる展覧会を東京と大阪で開催。没後50周年を迎えた令和3年4月に名古屋の地で、蓬春が日本画に何を求め、何を目指したか。日本画創造への挑戦をご紹介しつつ、蓬春の人となりや画業の魅力をも十分に堪能いただける展覧会となった。

また、令和3年4月からの「没後50周年記念 山口蓬春展」は、日本国内に新型コロナウイルス感染症が蔓延する状況下という異例づくめの開催となったが、関係者のご協力、ご尽力なくして今回の開催は不可能ではなかったかと思われる。

最後に、本展開催にあたり、貴重な作品を快くご出品くださった所蔵者の皆さま、ご協力を賜りました株式会社朝日新聞社、株式会社中日新聞社、株式会社NHKプロモーション、株式会社NHKプラネット近畿、株式会社NHKエンタープライズ中部、株式会社高島屋、株式会社ジェイアール東海高島屋、その他関係各位に厚く御礼申し上げます。



山口蓬春展バナー(日本橋高島屋)



オープニングセレモニー(名古屋)

●入場者数実績

東 京：令和元年8月 7日（水）～8月19日（月） 入場者数：26,066名

大 阪：令和元年8月28日（水）～9月 9日（月） 入場者数：20,885名

名古屋：令和3年4月14日（水）～4月26日（月） 入場者数：11,687名

●広報関連活動

1. 学芸員によるギャラリートーク

（東京会場）8月 7日（水）、8月11日（日）

（大阪会場）8月28日（水）、9月 1日（日）

（名古屋会場）新型コロナウイルス感染症拡散防止のためギャラリートークは中止。

2. プロモーション動画の作成

- ・「山口蓬春展 新日本画創造への飽くなき挑戦 高島屋」（2分30秒）（ショートバージョン：20秒）（東京・大阪会場）
- ・「蓬春モダニズムの代表作《望郷》を学芸員が解説 山口蓬春展」（3分40秒）（東京・大阪会場）
- ・「山口蓬春展の楽しみ方 山口蓬春記念館副館長インタビュー」（6分15秒）（名古屋会場）

●その他

山口蓬春展 オリジナルグッズを販売。



絵葉書、一筆箋、ハンカチ、マスクほか



両国屋是清製 千なり「望郷」

●印刷物



チラシ《望郷》小下絵、部分
(東京会場)



チラシ《望郷》小下絵、部分
(大阪会場)



ポスター《望郷》小下絵、部分 (大阪会場)



チラシ《望郷》部分
(名古屋会場)



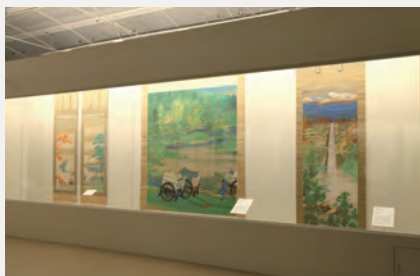
ポスター《望郷》部分 (名古屋会場)



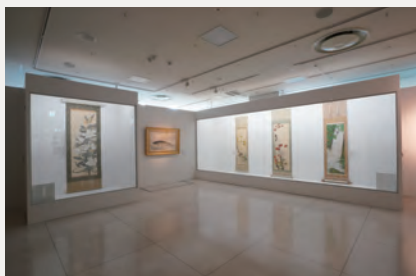
図録表紙《望郷》(名古屋会場)

●展覧会の構成

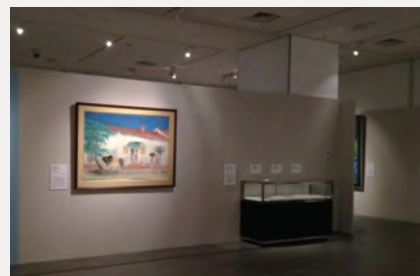
本展では蓬春の画業を時代ごとに6セクションに分けて紹介した。



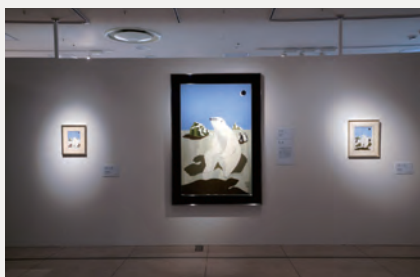
I やまと絵の頂点へ



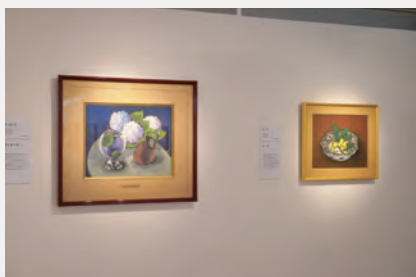
II 蓬春美への飛躍



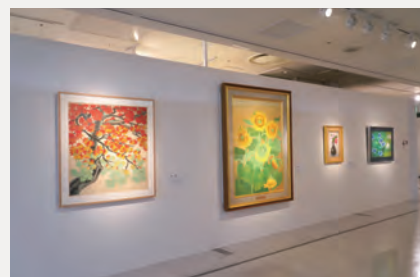
III 南方へ



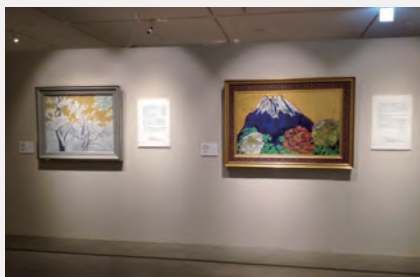
IV 蓬春モダニズムの展開



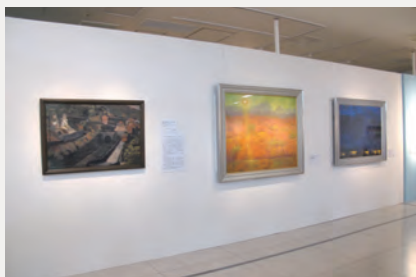
V リアリズムの追求



VI 新日本画への昇華



エピローグ 蓬春へのオマージュ (東京・大阪)



同左 (名古屋)



画室再現コーナー



高島屋所蔵の山口蓬春作品 (東京・大阪のみ)

出品目録

作品 番号	作品名	制作年	材質・技法	形状	発表展等	所蔵	東京	大阪	名古屋
I やまと絵の頂点へ									
1	三宅克己著 『水彩画指南』模写	明治41年(1908)	紙、水彩・鉛筆・ペン	洋綴		山口蓬春記念館	○	○	○
2	風景	大正元年(1912)	板、油彩	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
3	小径	大正元年(1912)頃	カンヴァスボード、油彩	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
4	女の肖像	大正元年(1912)頃	板、油彩	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
5	路面電車	大正3年(1914)	板、油彩	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
6	ニコライ堂	大正5年(1916)	板、油彩	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
7	虹	大正8-9年(1919-20)	絹本着色、金泥	軸装		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
8	燈籠大臣	大正8-9年(1919-20)	絹本着色	軸装		山口蓬春記念館			○
9	伊都久嶋	大正12-13年(1923-24)	絹本着色	軸装		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
10	初夏の頃(佐保村の夏)	大正13年(1924年)	絹本着色	二曲一隻屏風	第4回新興大和絵会展	山口蓬春記念館	○	○	○
11	秋二題	大正13年(1924年)	絹本着色	二曲一隻屏風仕立て	第5回帝国美術展覧会(帝展)	常楽寺美術館	○	○	○
12	木場	大正14年(1925年)	絹本着色	額装	新興大和絵会同人合作 「東都近郊十二景」のうち	山口蓬春記念館	○	○	○
13	武陵桃源	昭和2年(1927)	絹本着色	軸装	第7回新興大和絵会展	山口蓬春記念館	○	○	
14	緑庭	昭和2年(1927)	絹本着色	軸装	第8回帝展	山口蓬春記念館	○	○	○
15	春秋遊宴	昭和4年(1929)	絹本着色	双幅		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
16	那智の滝	昭和4年(1929)	絹本着色	軸装	羅馬日本美術展覧会	公益財団法人二階堂美術館	○	○	
17	扇面流し	昭和5年(1930)	紙本着色	二曲一隻屏風	第10回新興大和絵会展	山口蓬春記念館	○	○	○
II 蓬春美への飛躍									
18	飛潭	昭和3-4年(1928-29)	絹本着色	軸装		山口蓬春記念館			○
19	夏雨秋晴	昭和10年(1935)頃	(右隻)紙本墨画 (左隻)紙本着色	二曲一双屏風		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
20	錦秋	昭和11年(1936)	絹本着色	軸装		株式会社三井住友銀行			○
21	爽秋	昭和12年(1937)	絹本着色	軸装		株式会社三井住友銀行			○
22	如月	昭和12年(1937)頃	紙本着色	軸装		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
23	鯉	昭和14年(1939)	紙本着色	額装	第2回個展	個人			○
24	夜梅	昭和13年(1938)	紙本着色、金泥	軸装		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
25	泰山木	昭和14年(1939)	絹本着色	軸装	第2回個展	山口蓬春記念館	○	○	○
26	錦秋	昭和19年(1944)	紙本着色	軸装		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
27	富貴花	昭和19年(1944)頃	紙本着色、金泥	軸装		公益財団法人二階堂美術館	○	○	
III 南方へ									
28	山口蓬春撮影 「南嶋薄暮」に描かれた建物 台南にて	昭和13年(1938)	写真プリント			山口蓬春記念館	○	○	
29	山口蓬春撮影 「南嶋薄暮」に描かれた パイワン族の少女	昭和13年(1938)	写真プリント			山口蓬春記念館	○	○	○
30	山口蓬春撮影 「南嶋薄暮」の題材となった 台湾のコブ牛	昭和14年(1939)	写真プリント			山口蓬春記念館	○	○	○
31	南嶋薄暮	昭和15年(1940)	紙本着色	額装	紀元二千六百年 奉祝美術展覧会	山口蓬春記念館	○	○	○
32	拾香集	昭和17年(1942)	紙本着色	卷子	南方戦線従軍報告画 展覧会	山口蓬春記念館			○

作品番号	作品名	制作年	材質・技法	形状	発表展等	所蔵	東京	大阪	名古屋
IV 蓬春モダニズムの展開									
33	爽秋	昭和23年(1948)	紙本着色	額装		公益財団法人北野美術館			○
34	カーネーション	昭和24年(1949)	紙本着色	額装		古川美術館			○
35	首夏	昭和24年(1949)頃	紙本着色	額装		個人			○
36	緑陰	昭和25年(1950)	紙本着色	額装		株式会社歌舞伎座	○	○	○
37	夏の印象	昭和25年(1950)	紙本着色	額装	第6回日展	個人	○	○	○
38	佐与利	昭和26年(1951)	紙本着色	額装	百二会第2回展	山口蓬春記念館	○	○	
39	望郷	昭和28年(1953)	紙本着色	額装	第9回日展	個人	○	○	○
40	望郷 小下絵	昭和28年(1953)	紙本着色	額装	東山魁夷旧蔵	山口蓬春記念館	○	○	○
41	望郷 小下図	昭和28年(1953)	紙本着色	額装	六世中村歌右衛門旧蔵	個人	○	○	○
42	青沼新秋	昭和29年(1954)	紙本着色	額装	第10回日展	個人	○	○	○
V リアリズムの追求									
43	まり藻と花	昭和30年(1955)	紙本着色	額装	第8回彩交会展	山口蓬春記念館	○	○	○
44	枇杷	昭和31年(1956)	紙本着色	額装	燦光会第2回展	山口蓬春記念館	○	○	○
45	静物(遠三彩鉢と果物)	昭和31年(1956)	紙本着色	額装	中央公論社屋竣工画廊開設記念展	山口蓬春記念館	○	○	
46	百合	昭和32年(1957)	紙本着色	額装		山口蓬春記念館			○
VI 新日本画への昇華									
47	白蓮木蓮	昭和32年(1957)	紙本着色	額装	新橋演舞場緞帳原画	山口蓬春記念館			○
48	秋果	昭和35年(1960)	紙本着色	額装	尚美展	株式会社三井住友銀行			○
49	洋梨	昭和35年(1960)	紙本着色	額装	春風洞画廊開設記念展	桑山美術館			○
50	赤繪皿	昭和35年(1960)	紙本着色	額装			○	○	○
51	洩るゝ陽	昭和36年(1961)	紙本着色	額装	百二会第7回展	山口蓬春記念館	○	○	○
52	染付の皿	昭和36年(1961)	紙本着色	額装	第14回彩交会展	公益財団法人北澤美術館	○	○	
53	瓶花	昭和36年(1961)	紙本着色	額装	山口蓬春自撰展		○	○	○
54	新冬	昭和37年(1962)	紙本着色	額装	百二会第8回展	山口蓬春記念館	○	○	
55	花菖蒲	昭和37年(1962)	紙本金地着色	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
56	ばら	昭和37年(1962)頃	紙本着色	額装		公益財団法人北澤美術館	○	○	
57	夏影	昭和38年(1963)	紙本着色	額装	第16回彩交会展	山口蓬春記念館	○	○	○
58	瓶花	昭和40年(1965)	紙本着色	額装		山口蓬春記念館			○
59	秋香	昭和42年(1967)	紙本着色	額装		公益財団法人北澤美術館	○	○	
60	陽に展く	昭和43年(1968)	紙本着色・金砂子	額装	第11回新日展	宗教法人靈波之光	○	○	○
61	楓図 下図	昭和45年(1970)	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩・岩絵具	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
62	夏の花	昭和45年(1970)	紙本着色	額装	清流会第22回展	山口蓬春記念館			○
63	桃 未完成	昭和46年(1971)	紙本着色金泥	額装		山口蓬春記念館	○	○	○
エピソード 蓬春へのオマージュ									
64	東山魁夷(1908-1999) 庭の雪	平成5年(1993)	紙本着色	額装	山口蓬春記念館開館記念	個人	○	○	
65	片岡球子(1905-2008) 富士に献花	平成6年(1994)頃	紙本着色	額装	山口蓬春記念館開館記念	個人	○	○	
66	加藤藤一(1916-1996) 総がらみ	平成4年(1992)	紙本着色	額装	山口蓬春記念館開館記念	個人			○
67	奥田元宋(1912-2003) 妙義湖秋耀	平成4年(1992)	絹本着色	額装	山口蓬春記念館開館記念	個人			○
画室再現コーナー									
68	山口蓬春邸画室より 制作に使った机、椅子、画材 吉田五十八設計 テーブルセット	昭和29年(1954) 昭和27年(1952)				山口蓬春記念館	○	○	○
高島屋所蔵の山口蓬春作品									
69	竹の図・鶴の図 表紙絵	昭和27年(1952)	紙本着色	額装		高島屋史料館	○	○	
70	鳥 大団扇	昭和37年(1962)	紙本着色	額装		高島屋史料館	○	○	
71	ばら 小扇子	昭和38年(1963)	紙本着色	額装		高島屋史料館	○	○	
72	紅梅白梅 飾扇子	昭和44年(1969)	紙本着色			高島屋史料館	○	○	
特別出品									
73	須田国太郎(1891-1961) 東山トンネル	昭和2年(1927)	カンヴァス 油彩	額装		山口蓬春記念館			○

Ⅲ. 収蔵品修復（日本画）

笠 理 砂

平成31年度

当館所蔵作品・山口蓬春《南嶋薄暮》（昭和15年〔1940〕、紀元二千六百年奉祝美術展覧会出品作）は、結晶状のかび痕が多数箇所見られる他、額の下地から出たアクが本紙に染み出て格子状のシミを作っていた。

また、東山魁夷家から寄贈を受けた《望郷 小下絵》は、本紙と額マットにシミがあり目立っていたことから、これら両作品の修理作業を実施した。

1. 作業期間 平成31年4月から令和元年7月まで
2. 委託業者 株式会社 半田九清堂
3. 委託作品 (1) 山口蓬春《南嶋薄暮》 昭和15年（1940） 紙本着色／額装
本紙：91.1×127.1cm 額寸：114.1×150.1cm
(2) 山口蓬春《望郷 小下図》 昭和28年（1953） 紙本着色／額装
本紙：29.4×21.5cm 額寸：45.9×38.2cm
4. 修理概要 (1) カビ・汚れ・シミの除去・緩和、膠による絵具の剥落止め、旧裏打紙の除去、新規裏打ちなどの修理。
骨下地の新調、額装及び収納ケースの作成。
(2) 汚れ・シミの除去・緩和、膠による絵具の剥落止め、旧裏打紙の除去、新規裏打ちなどの修理。
骨下地の新調、マット裂の新調、額装。

令和2年度

当館所蔵作品《楓図 下図》（昭和45年〔1970〕）は皇居宮殿松の間杉戸「楓」を収めた後、蓬春が手元に置くために描きおこしたもので、この下図を保管していた方法が、マクリ状の中心を折って仮巻軸に巻かれていた状態であったため、本紙自体に深い折れ皺が確認されていた。

また、《ペルシアの鉢》（昭和39年〔1964〕）は、蓬春自らが蒐集し、現在も記念館の収蔵品として展示活用している《白地彩画飛鳥文鉢》（イラン・トランスオクシアナ出土、9-10世紀頃）を題材として描かれた作品である、紙面全体に赤色のシミが広がっていた。

六潮会同人で洋画家の中川紀元が、春子夫人の横顔を描いた《女の顔》（春子夫人の像）（昭和11年〔1936〕、紙本墨画淡彩・色紙）の画面上にも同様に広がるシミが認められていた。

これら3作品について、展示可能で良好な状態に戻すための修理作業を実施した。

1. 作業期間 令和2年8月から令和3年2月まで
2. 委託業者 有限会社 目黒黄鶴堂
3. 委託作品 (1) 山口蓬春《楓図 下図》 昭和45年（1970） 紙、鉛筆・色鉛筆・水彩・岩絵具／額装
本紙：95.0×87.0cm 額寸：110×100cm
(2) 山口蓬春《ペルシアの鉢》 昭和39年（1964） 紙本着色／額装
本紙：57.0×54.0cm 額寸：77.0×74.0cm
(3) 中川紀元《女の顔》（春子夫人の像）（昭和11年〔1936〕、紙本墨画淡彩・色紙）
本紙：27.0×23.5cm 額寸：46.0×43.0cm
4. 修理概要 (1) 深い折れ皺を除去し、本紙を本来のフラットな状態に戻す修理。
(2) 絵画部分のカビを除去、シミ抜きを行った後、消毒・乾燥を実施。
(3) 絵画部分のカビを除去、シミ抜きを行った後、消毒・乾燥を実施。

IV. 収蔵品修復（油彩画）

岡田 修子

令和元年（2019）に当館へ寄贈された下記作品は、絵具層の剥離や画布の変形などの経年劣化がみられたほか、額については簡易額装であったことから保存に適した額に新調することを含め修復作業を実施した。

1. 作業期間 令和元年6月19日から10月20日まで
2. 委託業者 森絵画保存修復工房

委託作品及び修理概要

須田国太郎 作

主 題 東山トンネル

画 像



寸 法 60.6 : 60.4 : 60.5 (左 : 中 : 右) × 91.0 : 90.8 : 90.8 (上 : 中 : 下)
(単位 : cm) 対角線108.8 (左上-右下)、108.8 (右上-左下)

技 法 油彩／画布

制 作 年 昭和2年

署 名



左上サイン「須」

付 属 品 簡易額装

記 載 事 項 (裏書きなど)
・木枠裏面右上に「東山トンネル30」と書かれた白い紙が貼付されていた
・木枠裏面中央に「39.11.24東山トンネル」と書かれた紙がセロハンテープで貼付されていた
・「HANABISHI」表記の画鋸が木枠裏面右上部分に刺さっていた

修 復 処 置
1. 剥離留め
2. 木枠から画布の取り外し
3. 裏面の洗浄
4. 変形矯正
5. ストリップライニング（画布の周辺部に麻布を帯状に接着）
6. ルースライニング（既存の木枠にポリエステル布を張り込み、その上から画布を張り込む）
7. 表面の洗浄
8. 光沢斑の調整
9. 充填・補彩
10. 額の新調

V. 収蔵品保存対策

平成27年度（2015）より継続している環境調査及び除塵防黴施工を実施した。

	令和元年度	令和2年度
環境調査		
調査年月日	令和元年7月18日～8月16日	令和2年6月30日～7月30日
施工場所	展示室1～3、収蔵庫、書庫	展示室1～3、新収蔵庫、収蔵庫、書庫
施工業者	株式会社フミテック	株式会社フミテック
調査方法	昆虫生息調査	昆虫生息調査
	付着菌調査	表面付着菌調査
	空中菌調査	空中浮遊菌調査
	酸・アルカリ検査	酸・アルカリ検査
使用機器名	付着菌調査 : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地	付着菌調査 : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地
	空中浮遊菌調査 : MERCK社 MAS100ECO エアースンプラー : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地	空中浮遊菌調査 : MERCK社 MAS100ECO エアースンプラー : 栄研化学(株)PT2625 : CP加ポテトデキストロース寒天培養地
	浮遊粉塵量調査 : 柴田科学器機械工業(株) デジタル粉塵計 P-5H2型	浮遊粉塵量調査 : 柴田科学器機械工業(株) デジタル粉塵計 P-5H2型
	温・湿度調査 : (有)東京吉野計器 アスマン式乾湿球温度計 SS-3BM	温・湿度調査 : (有)東京吉野計器 アスマン式乾湿球温度計 SS-3BM
除塵防黴施工		
施工年月日	令和元年8月2日、4日、5日	令和2年7月28日、30日、31日
施工場所	展示室1～3、新収蔵庫、収蔵庫、書庫	展示室1～3、新収蔵庫、書庫
施工業者	株式会社フミテック	株式会社フミテック
施工目的	除塵防黴	除塵防黴
使用資材	テックリンウェット（防黴用ウェットタオル） テックリンドライ（除塵用ドライクロス）	テックリンウェット（防黴用ウェットタオル） テックリンドライ（除塵用ドライクロス）

令和2年度に収蔵庫の棚を木製から金属製の棚へ入替作業を実施した。

1. 作業期間 令和3年3月15日（月）
2. 作業場所 収蔵庫
3. 作業内容 収蔵庫棚を木製から金属製棚へ入替作業
（木製棚撤去作業、IPM清掃を含む）
4. 委託業者 株式会社クマヒラ



VI. 新収蔵品

令和元年度寄贈



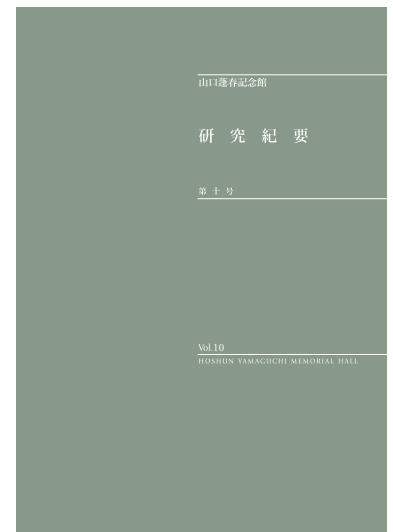
須田国太郎
《東山トンネル》
昭和2年(1927)
油彩・カンヴァス・額装
60.7×91.0(寄贈時)

VII.刊行物の発行（平成31～令和2年度）

■『山口蓬春研究紀要』第10号

発行時期：令和3年（2021）3月

掲載内容：エッセイ「画業回想-山口蓬春」／水沢勉、山口蓬春筆「天皇の世紀」装画についての考察／笠理砂、蓬春研究ノート（10）山口蓬春の印章について（その2）／岡田修子、湊川神社に奉献された山口蓬春のやまと絵屏風をめぐる一考察／吉田敬、山口蓬春宛書簡について（7）／吉田敬



山口蓬春記念館 年報 第二号

令和3年6月

編集・発行 山口蓬春記念館
〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2320
電話 046-875-6094
制作 株式会社 野毛印刷社

HOSHUN YAMAGUCHI MEMORIAL HALL ©2021